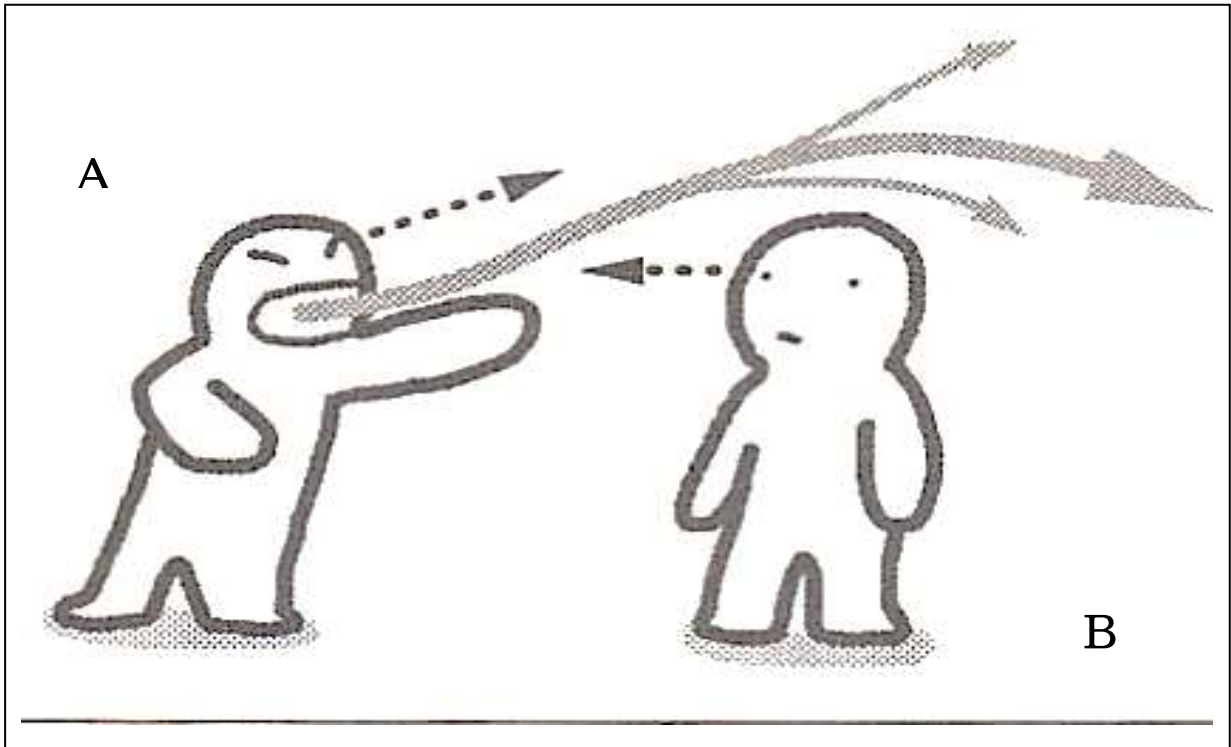


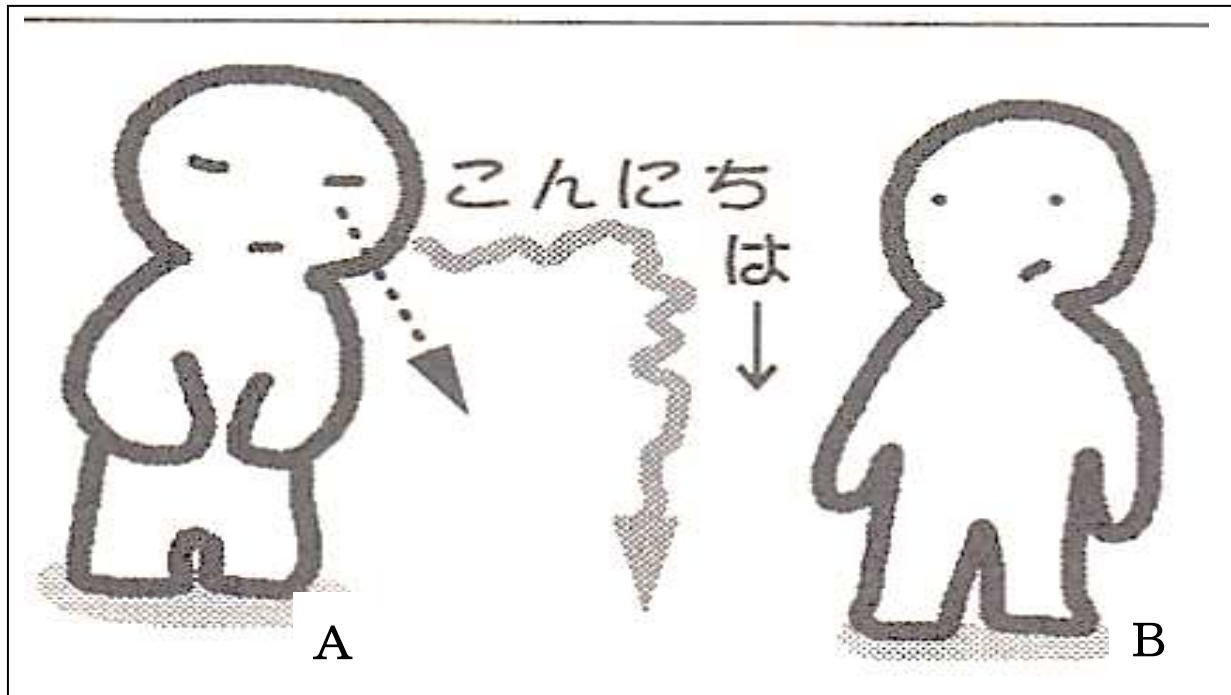
資料 I 絵カード 1 2 種類

①



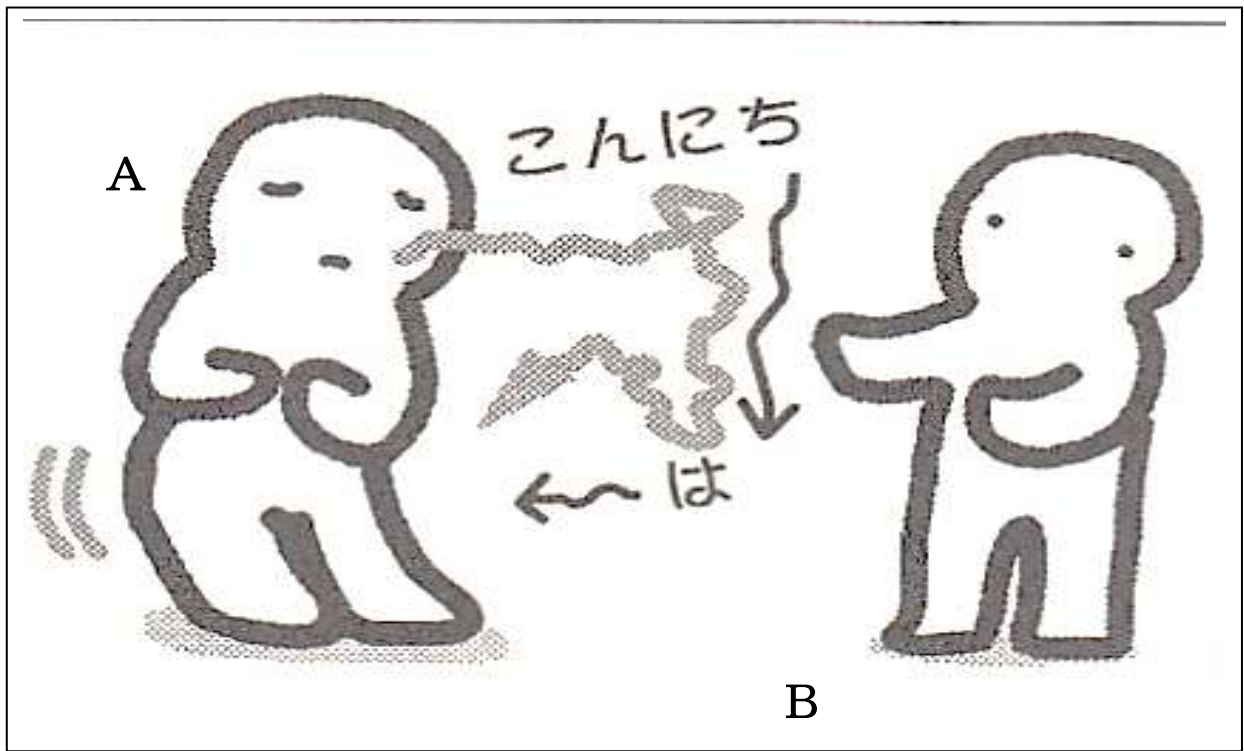
Bは、Aの方をじっと見つめている。Aは、Bの方へ声を届けようと思いはあるが、声を届ける相手Bの方を見ていない。その為、途中から声が宙をういている状態である。つまり、声が届いていない様子である。

②



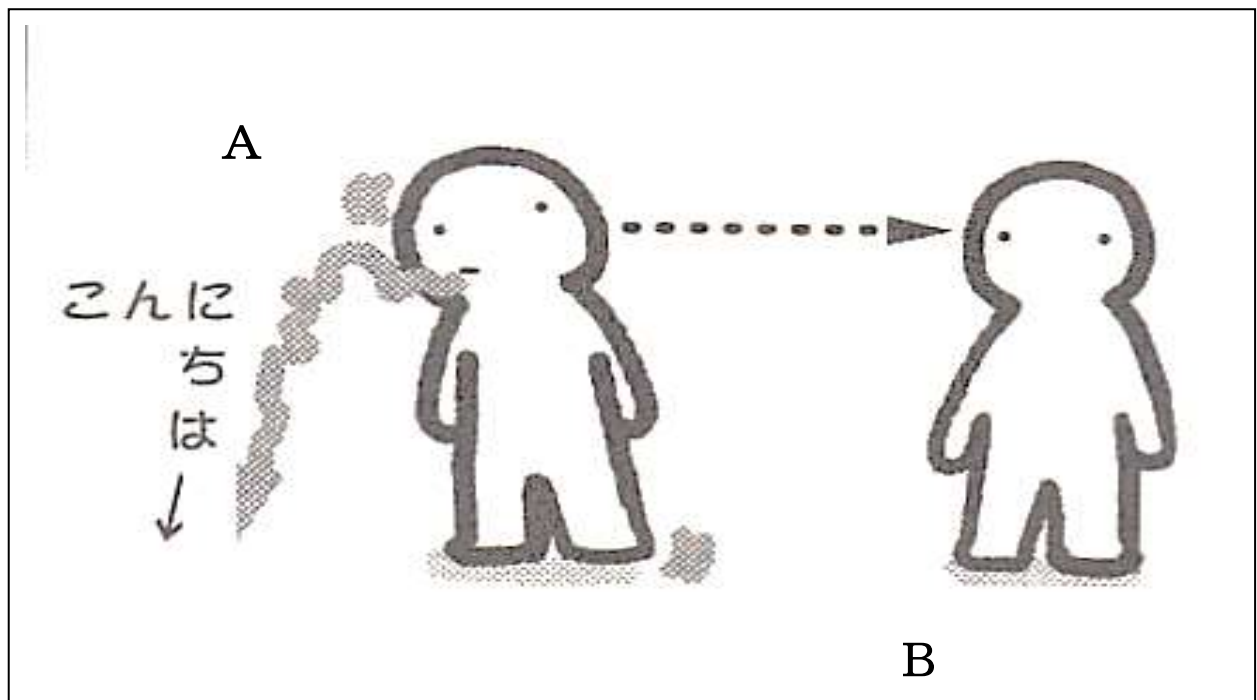
Aは、観察している側からしてみると、俯きかげんで視線が上がらない。声は出すものの、Bに届くのがコワイのか恥ずかしいのか、おずおずとしているのが伝わる。その様子と同じように、声がお辞儀をしてしまう。つまり、声がAとBの間に落ちてしまう為、Bに届かない様子である。

③



Aは、全てを言い終わるか終らないかの、最後の語尾のところ、腰を退いて後ろに下がってしまう為、声の軌跡も同じようになってしまう。Aの声がBとの間に落ちるだけでなく、後ろに退けてしまうことで、Bに声が届かない様子である。

④



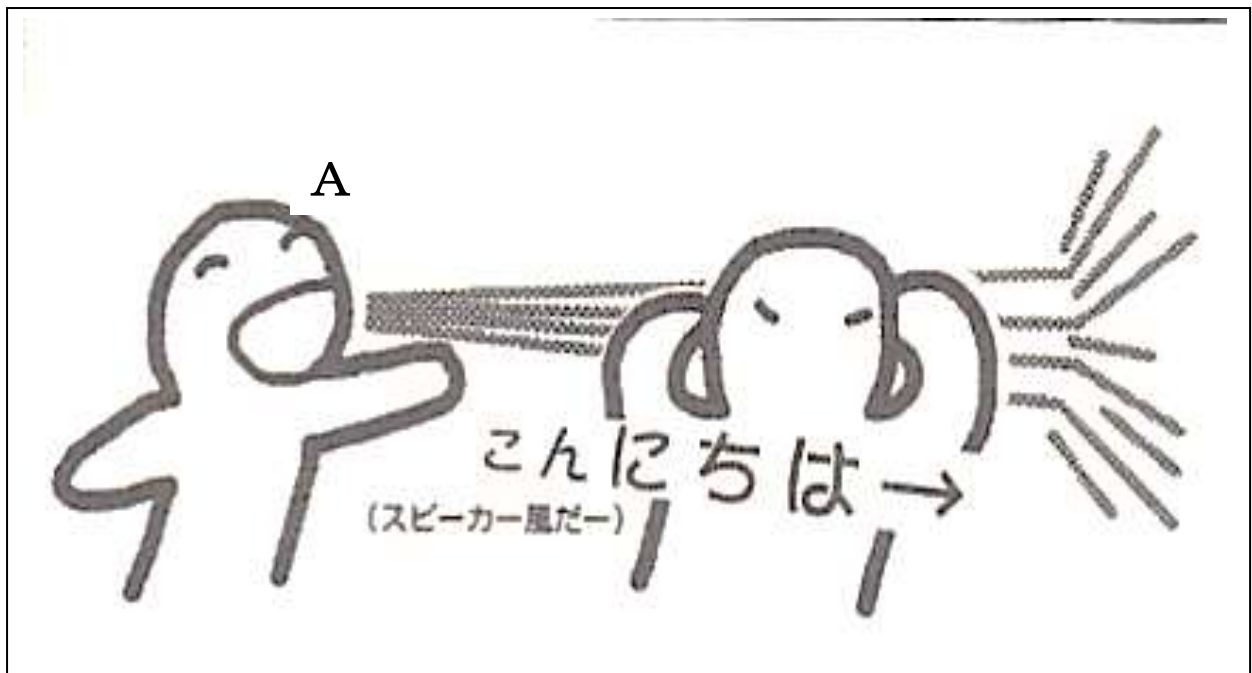
AとBは対峙し、Aの視線は、Bに向かっている。しかし口元はBと反対の方を向いているため、口元の方へ声に向いてしまう。そのために、声がBに届かない様子である。

⑤



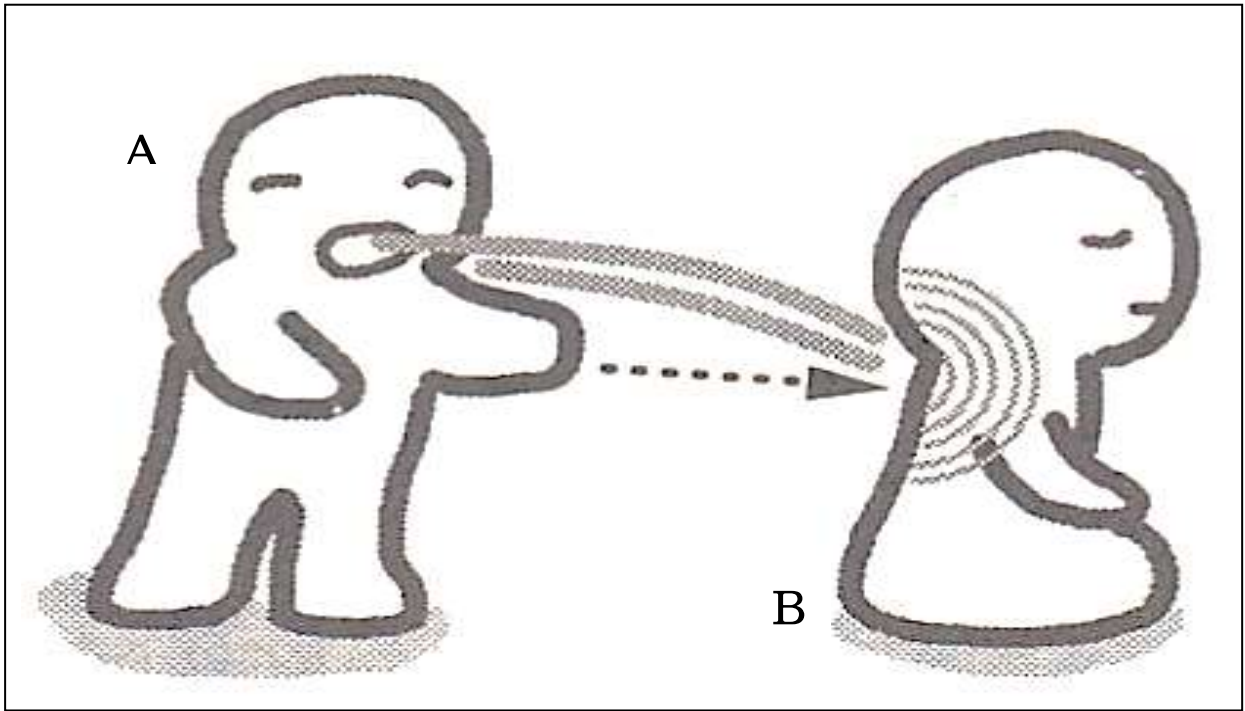
AはBに対峙し、頑張って勢いよく声を出したら、Bは、「ちょっと待って、来ないで」と、後ずさりしたくなる様子。あまりにも直接ワッときたために、Bは退いてしまい、受け入れたくない様子である。また、声は散らばるため、Bに声が届いているようで、実は届いていないのである。

⑥



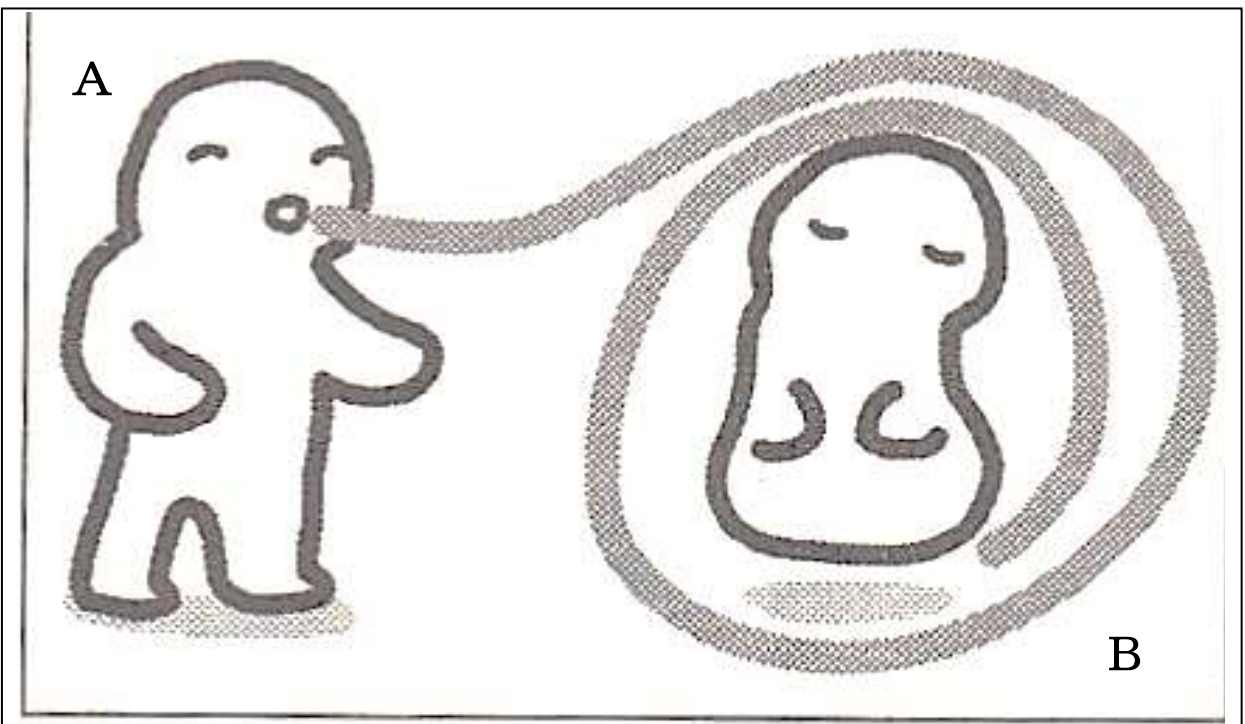
Bは、Aの声が確かに自分に向かってきていたと言うが、スピーカのように強く、耳をふさぎたくなる声。あまりにもストレートすぎて通り抜けてしまったようである。つまり、Bに声が届いているようで、結局は届いていないのである。

⑦



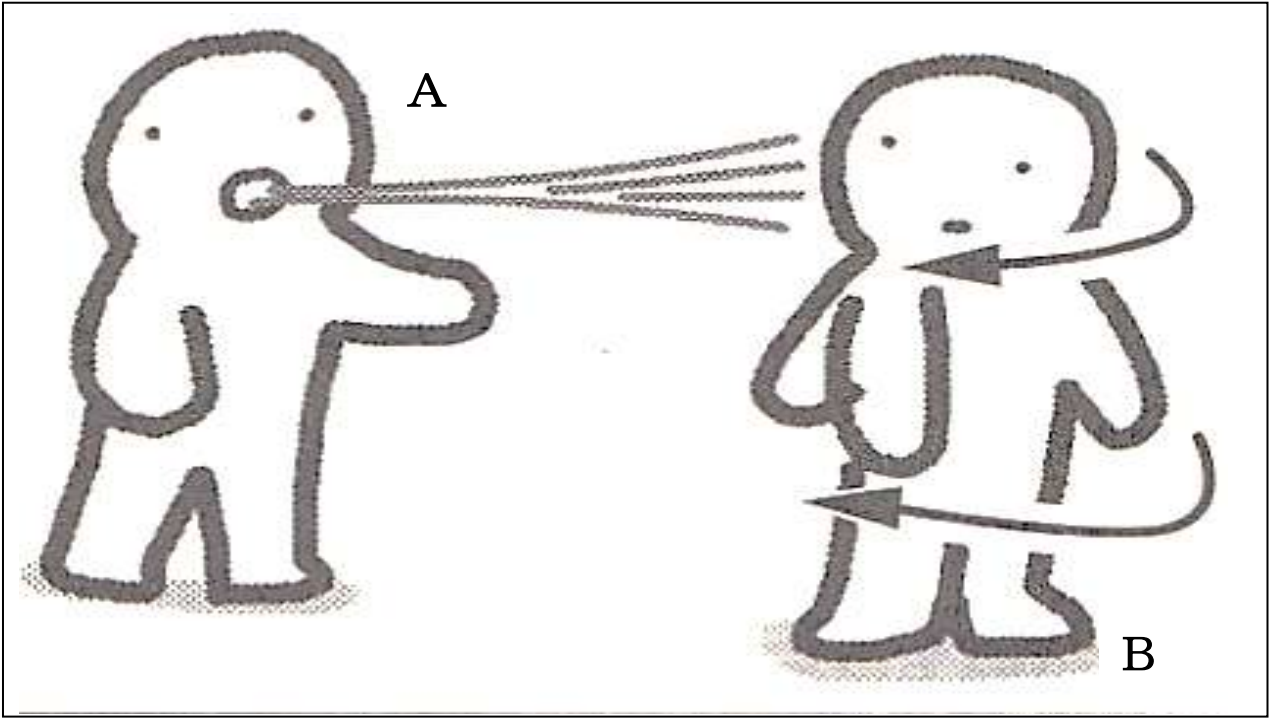
Bには「声きた」と感じる。肩を押さえたり、胸を指したり、確かに自分ひとりに話しかけられたと感ずることができ。まさしく、Aの声、Bに触れた、つまり声が届いたという様子である。

⑧



Bには「声きた」と思ふと、ふうっと身体全体を包まれた感じである。つまり、Aの声、Bに触れ、「声」でBを包み込む様子であり、これもBに声が届いたという様子である。

⑨



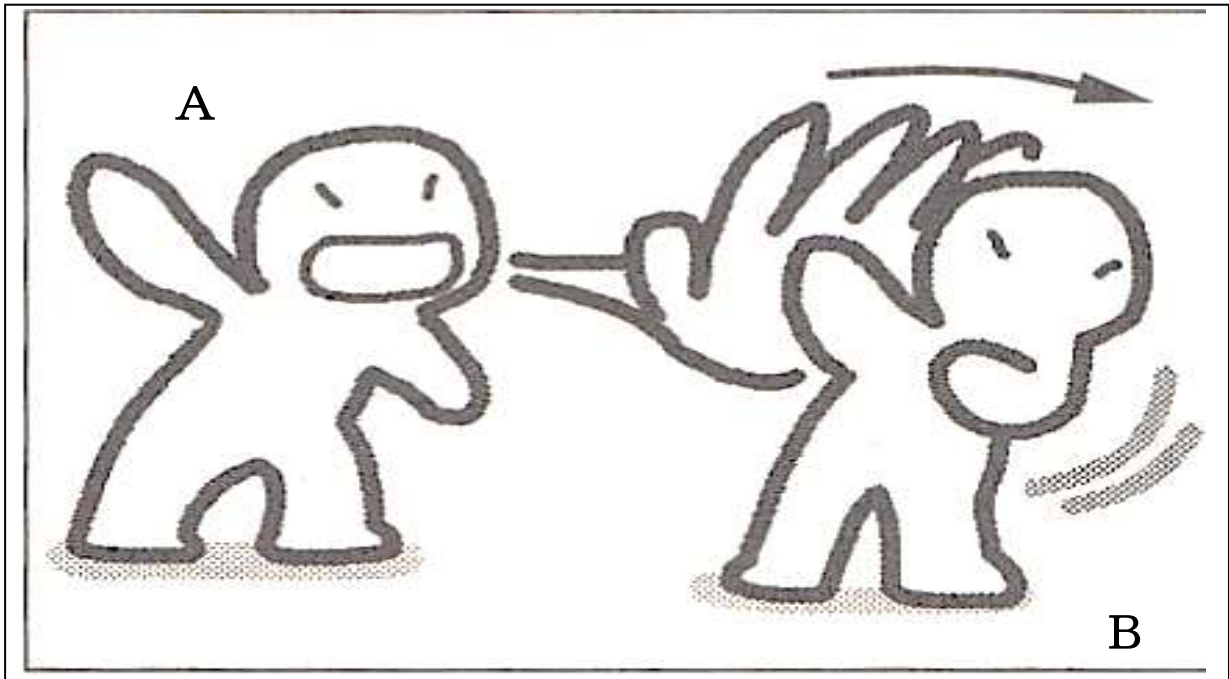
Bに「声きた」と、思うか思わないうちに、あっと身体が（Aに）振り向いていたという様子である。観察している側からも見事と言いたくなるように、言葉が相手に伝わっていた。じかに触れているような様子である。本来の「話しかける」という働きの様子である。

⑩



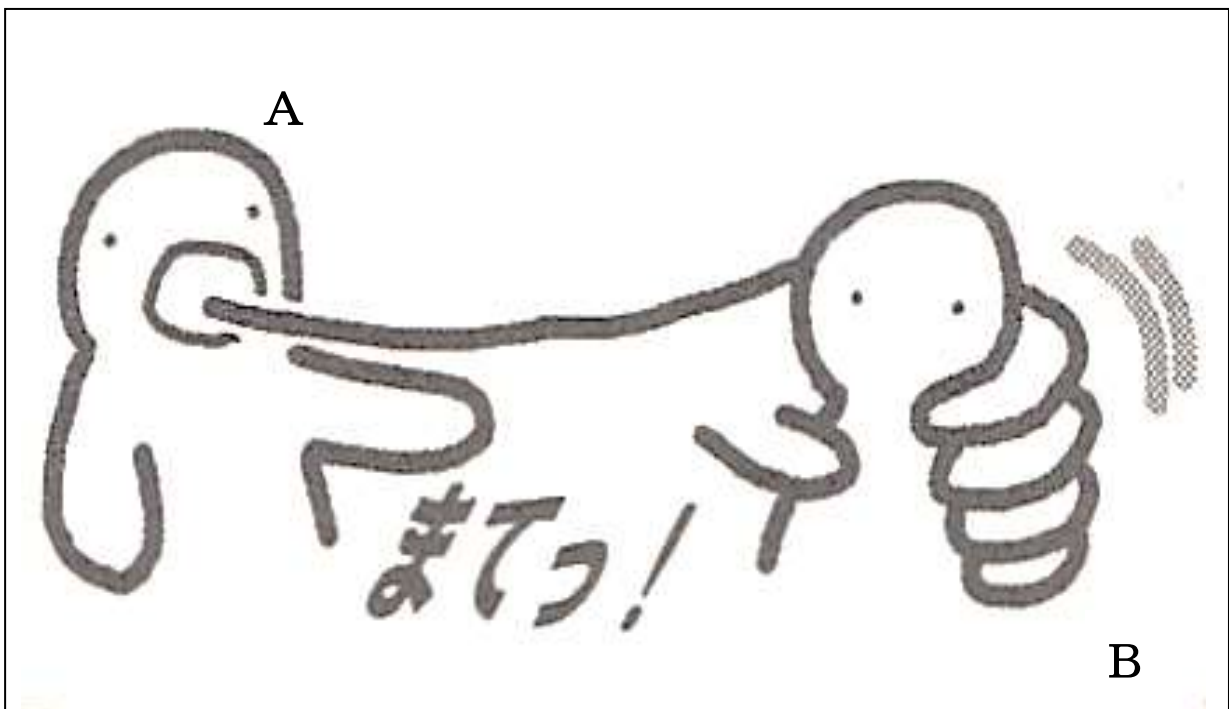
Aは「誰でもいいから私の話を（気持ちを）聞いて！！」と大きな声で話すが、「誰」に向かって話しているのか伝わらないため、いくら大きな声で叫んでも、結局、誰にも伝わらない様子である。これは、「誰でもいいから」と、聞く側をBと限定していないため、声が散らばってしまっている様子である。

⑪



Aの声が、Bに対してドーンと力強い勢いで向かっている様子である。Bにとってみれば、「わっ。やめろ。こないで」相手の身体を遮り、突き飛ばしたい気持ちを表している様子である。ストレートに声が届いているように見えるが、Bとしてみれば、「もういい。届くな」という感じである。

⑫



Aの声で、Bを捕まえている様子である。⑧や⑨のような、優しく「触れる」とか「包む」とは、意味合いが違い、Bを声で「掴む」のである。Bにはもちろん声は届いているが、気持ちはどうなのだろうか。「えっ？」と唾然とすることもあれば「嫌」と拒否をしたくなることもあるのではないだろうか。

- ※1. 以上①～②のイラストは、竹内 敏晴 著「声が生まれる 聞く力・話す力」（2007）東京；中央公論新社（p151～p154）より引用。
また、の文章は、著書の中より引用する部分と、私なりに解釈しているものがある。
- ※2. 1枚のカードには1つのイラストとし、各カードの裏には、そのイラストで示されている説明やポイント（イラストの下にある の中に書かれている内容）を貼り、各指導グループの実態に合わせて、「声」と「身体」と「視線」について、大切なことを伝えられるようにしておく。
- ※3. 12種類の様子について、全てを毎回提示して指導するのではなく、学習グループの実態や授業を行う日の生徒の様子に応じて、必要なカードを提示して指導をする。

資料Ⅱ 【足裏全体を意識させる活動】

～ 「聞いて見て身体を動かそう」 身体軸を意識させる取組 ～

足のつま先から踵までを使って立つ（座る）ことを意識させるための活動として、また身体軸を意識させる取組の一環として、「青竹」をリズムに合わせて踏みしめる活動を取り入れてみました。その様子を写真にて紹介いたします。



教員2

教員1

活動①

教員1はタン布林と太鼓でリズム（♪）を叩く。生徒たちは、「タン布林と太鼓の法則」に従って、一定のリズムに合わせて足踏みをする。活動に心配な生徒は、教員2を見本とする。

{ タン布林⇒床で足踏み
太鼓⇒青竹の上で足踏み

教員 2



生徒の様子としては、「青竹」の上では、教員2のように、膝を高く上げて足踏みをするのが難しい。

【理由】

- ①足を踏み下ろす部分がたくさんの突起物があり、安定していないから。
- ②突起物が当たり、足裏が痛いから。



一方、床での足踏みは、膝を高く上げて、足踏みをすることができる。

【理由】

- ①足を踏み下ろす床が平面であり、安心して足を下ろすことができるから。

活動②



教員 2

活動①が慣れてきたら、左の写真のように、手の動作を加えていく。

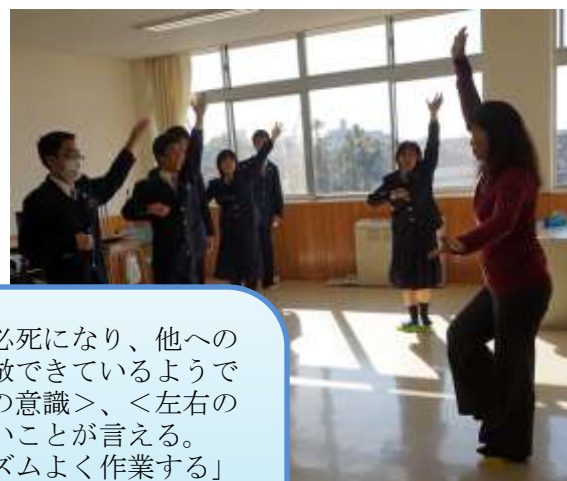
生徒たちは足踏みを続けながら、見本である教員2に注目し、教員2の動きを模倣する。

※足踏みについては、活動①の「タンブリンと太鼓の法則」を、そのまま用いる。

耳⇒音色の変わり方に集中する。

目⇒教員の動きに集中して、動作を模倣する。

身体⇒ぶれないように身体軸（重心）を保つように、足裏で床を踏みしめる。



リズムに合わせて動きを付けると、模倣することに必死になり、他への注意力が欠けてしまう。また模倣では、なんとなく模倣できているようではあるが、よく見ると、<手のひらの向き>、<指先の意識>、<左右の手のポーズ>など、正確に模倣できている生徒が少ないと言える。

職種によっては「聞いて判断」、「見て真似る」、「リズムよく作業する」ことなども要求されることも少なくないことから、このような取り組みも行ってみたい。

あくまでも「楽しみながら、遊び的要素」の中で取り組み、活動の動機づけに、音楽（楽器の音色）で支えるように行った。